

〔研究ノート〕

定家筆本「興風集」の翻刻とその本文について

山 田 清 市

藤原興風は平安初期の人で、院藤太と号したが、正確な生没年は未詳である。正六位上相模掾道成の息で、昌泰三年相模掾、延喜二年治部少丞、同四年上野権大掾、同十四年下総大掾を経て、正六位上治部丞に至る。卑官であったが、「寛平御時后宮歌合」「延喜十三年亭子院歌合」等に貫之らとともに出詠し、古今集にも十七首採録された有数歌人であった。興風の歌は、「興風集」として「三十六人集」の中に加わり、伝流されてきた。

今日「興風集」の伝本は

- (一) 歌仙家集本系統
- (二) 伝坊門局筆本系統
- (三) 西本願寺本三十六人集系統

の三系統に大きく分類され、他に部類名家集切の存在がしられている。これらの系統は、いずれも同一系統から派生したとみなされているが、翻刻した定家筆興風集は以下の理由によって、今日の伝本の源流的位置に立つものとみな

されるのである。

この定家筆本は、前記三系統の中、(一)の歌仙家集本系統の最高位に位置するものである。さて、(二)の伝坊門局筆本系統は、(一)の歌仙家集本系統五十二首に、更に末尾に十三首増補したものであり、(三)の西本願寺本系統は総歌数五十七首で、これも、(一)の歌仙家集本系統を、四季・恋・雑部に配列しなおしたものとみなされ、したがって、(一)の歌仙家集本系統は、三系統の原形的位置に立つものとなってくるわけである。

ところで、(一)の歌仙家集本系統は、正保版等によって、最も多く伝流しているが、末尾に記載する

他本歌

女のもとより心さしのほとをなんえしらぬと申たりければ

後
我恋をしらんと思はゝたこの浦に

立くる波の数をかそへよ

の一首を、定家筆本は持たぬことによって、右の記載が後の附加であることが判明する。更に、定家筆本は、歌仙家集本の巻頭歌の前に

寛平御時きさいの宮の歌合

春風はゝなのあたりをよきてふけ

心つかからやうつろふとみむ

という一首を記載するので、右は恐らく歌仙家集本における欠落とみなされるのである。その上更に、定家筆本三十
三首目にみえる

あたらしくわれのみやみむきくの花
うつらぬさきにこむ人もかな

の一首が歌仙家集本にみえない。これはすでに指摘されているように「躬恒集」に存在する歌で、歌仙家集本の意識
的削除とみなされるものである。以上の事実に一致を示すのは、宮内庁書陵部蔵御所本三十六人集であって、すでに
影印複製（新興社）がなされていて、伺い知ることができる。しかし右の御所本（五一〇・一二）では、歌仙家集本と同
じく十五首目の詞書において、定家筆本と左のごとき著しい異同を示すのである。

定 家 筆 本	御所本（五一〇・一二）
<p>宮つかへ人をとらへて侍りしに、ひきすへしていりはへ りにしかは、かたみにもをとてはへりし、かへしはへり とて あふまでのかたみとてこそとゝめつれなみたにうかふ もくつなりけり</p>	<p>おやのまもりけるむすめを、いとしのひてあひて、もの いひける程に、おやのあふといひければ、いそきていり にける、そのもかへすとて 逢までのかたみとてこそとゝめけめなみたにうかふも くすなりけり</p>

右の異同について、(一)の伝坊門局筆本も定家筆本に一致を示すのである。したがって、(二)の伝坊門局筆本は、従来
謂われてきたように、(一)の歌仙家集本の後に増補したとする考え方をとる時、歌仙本も御所本と同様の詞書を持つ

ので、右の異同部分の説明がつかなくなるのであるが、定家筆本によってはじめて、その疑問は解消するに至ったのである。すなわち伝坊門局筆本は、定家筆本、乃至はその書写下に立つ書本の系統によって書写され、増補されていたものであることがここに確認されるのである。

しかし定家筆本が、正保版歌仙家集本をはじめ、今日のところ歌仙本系の中、最も原形を伝えるとみなされる御所本(五一〇・一二)にも優位して、興風集のより原形を伝える証となるのは次の点である。すなわち定家筆本の最後は、五十二首目の

たれをかもしる人にせむたかさこの

まつもむかしのともならなくに

で終っているにもかかわらず、他本は更に次の一首を持つからである。

うくひすはあさむかるらんしら雪の

はなとみゆるまてえたにふれゝは

定家筆本最後の紙面には十分に余白があり、定家筆本が「たれをかもしる人にせむ」の歌でとどめねばならない理由は存在せず、これは他本が更にその後「うくひすは」歌一首を増補したとみなさざるを得ないのである。したがって定家筆本にこそ、興風集の最も原形的な形態と本文を見出すのである。

以下に翻刻紹介する興風集本文は、稿者が伝本調査のおり、越後の宮本家において、伝為氏筆本伊勢物語とともに

閲覧調査を許されたものである。その折の調査メモによると、

縦十六・五糎、横十五糎、薄様用紙に一面十行、平均五首を二行書にする。墨付本文六枚、白紙三枚の計九枚を枳型裂帖装に綴じた一冊であった。綴子表紙中央に「興風集」と記し、見返し中央にも「おきかせ」と記す。極札等はないが、定家の筆跡とみなされる。外装保存箱は墨塗漆箱や桐箱等によって四重に保管され、箱表には金泥でもって

興風集 定家卿筆

と記す鎌倉期の書写一冊であった。以下その本文を示すが、現存「興風集」の源流的位置に立つものとして、最高位の本文的価値を担うであろう。

翻 刻 本 文

お き か せ

(一ウ)

寛平御時きさいの宮の歌合

春風はゝなのあたりをよきてふけ

心つからやうつるふとみむ

さくらはなちくさなからにあたなれと

古

たれかは春をうらみはてつる

古 春かすみいろのちくさにみえつるは
たなひく山のはなのかけかも

古 こゑたえすなけやうくひすひとゝせに
ふたゝひとたにくへきはるかは
(二オ)

古 ちきりけむ心そつらきたなはたの
としにひとたひあふはあふかは

古 しらなみに秋のこのはのうかへるを
あまのなかせるふねかとそみる

古 うらちかくふりくるゆきはしらなみの
すゑのまつ山こそすかとそみる

古 君こふるなみたのところにみちぬれは
みをつくしてそわれはなりぬる

古 しぬるいのちいきもやすると心みに
たまのをはかりあひみゝてしかな
(二ウ)

おなし御時にうたゝてまつれと

おほせられければたつたかはもみち

はなかるといふうたかきてのちに

おなし心を

古

み山よりおちくるみつのいろみてそ

あきはかきりとおもひしりぬる

撰

おるからにわかなはたちぬをみなへし

いさおなしくは花ことにみむ

秋のゝのつゆにをかるゝをみなへし

はらふ人なみぬれつゝやふる

(三才)

をみなへしはなの心のあたなれは

秋にのみこそあひわたりけれ

さたやすの みこのきさいの宮の
あそんのさいふの五十

の賀たてまつりたまうける時の

御ひやうふのゑにさくらのはなみ

たるところに

古
いたつらにすくす月日はおほかれと
はなみてくらすはるそすくなき

宮つかへ人をとらへて侍りしに

ひきすへしていりはへりにしかは (三ウ)

かたみにもをとてはへりしかへ

しはへりとて

古
あふまてのかたみとてこそとゝめつれ
なみたにうかふもくつなりけり

古
うらみてもなきてもいはむかたそなき
かゝみにみゆるかけならすして

古
なにかそのなきなたつもおしからむ
しらてまとふはわれひとりかは

撰
このはちるうらになみたつ秋なれは
もみちにはなもさきまさりけり

寛平御時花の色は霞にこめてといふ心をよみて

たてまつれとあるに (四オ)

撰

山風のはなのかゝとふゝもとには春の
かすみそほたしなりける

うすぎこきいろはわけれと花といへは
ひとつかほにもみえわたるかな

きつゝのみなくうくすのふるざとは
ちりにしむめのはなにそありける

山ざとははるのかすみにとちられて
すみかまとへるうくひすそなく

あかすしてすぎゆくはるにたゝち

あらはことしはかりのあととはよかなむ (四ウ)

あらしふく山のふもとにふるゆきは
とくちるむめのはなかとそみる

なつのよの月はほとんどなくあけなから

あしたのまをそかこちよせつる

なつの月ひかりをしますてる時は

なかるゝみつにかけろふそたつ

むつましくかこひへたてぬかきつはた

たかためにかはうつろひぬらむ

やまの井はみつなきことそみえわたる

あきのもみちのちりてかくせは

(五才)

しらなみにおりかけあまのこく舟は

いのちにかふるみるめかりにか

ゆめをたに人のおもひにまかせなむ

みるは心のなくさむものを

みをもかつおもふものからこひといへは

もゆるなかにもいりぬへきかな

山かはのきくのしたみついかなれは
なかれて人のおいをせくらむ

あたらしくわれのみやみむきくの花
うつらぬさきにこむ人もかな

(五ウ)

おほそらの月のひかりをあしからの
山のこなたはあきにそありける

なみたかはそこはかゝみときよけれと
こひしき人のかけもみえぬも

おとこ山みねのもみちはちりにしを
てりてそみゆるしきにしければ

うらちかくたつあさきりはもしほやく
けふりとのみそあやまたれける

つくはねのかけにおひにしさとなれは
ひかりのおふるものとたにみす

(六オ)

新
しものうへにあとふみとむるはまちとり
ゆくゑもなしとなきのみそする

こひしともいまはおもはすたましひの
あひみぬさきになくなりぬれは

新
あへりとも心もゆかぬゆめちをははか
なきものとむへもいひけり

なけきこるをのゝひゝきのきこえぬは
やまの山ひこいつちいにしそ

新
あひみてもかひなかりけりむはたまの
はかなきゆめにおとるうつゝは
(六ウ)

あしたつのいつれのあさかなかさらむ
おもふ心のゆかぬかきりは

ゆめ\にたにあひみぬなからきえねとや
こひしきことをたゝしらせてむ

なきわひて身をうつせみとなりぬれは
うらむることもいまそきこえぬ

古
わひぬれはしひてわすれむとおもへとも
ゆめてふ物そ人たのめなる

うきてぬるかものうはけにをくしもの
きえてものおもふころにもあるかな

(七才)

こほれてもあれはたとへてなくさめし
なからのはしもいまはきこえす

こひしきにみもなけつへしなくさむる
ことにしたかふ心ならねは

古
みはすてつころをたにもうしなはし
つひにはいかゝなるやとをみむ

古
たれをかもしる人にせむいにしへの
まつもむかしのともならなくに

(七ウ)
(八才) 白